

般にはカシュガル本と呼ばれています)にコータン語の奥書があることと、この写本成立に果たしたコータン人仏教徒の役割については、前年度の研究で有る程度明らかにすることができました。

同じくサカ族の言語ではありますが、西域北道で用いられていたトゥムシク語の仏典は、小乗仏教のセンターであったクチャの仏教の影響を強く受けていて、トカラ語仏典と並行するテキストも発見されています。またトゥムシクで発見された仏教寺院の遺跡に残された塑像なども、クチャ仏教との強い関係を示しています。しかし発見されている資料の量そのものが少ないため、不明な点が多いのは残念なことです。

最後にアフガニスタン及びウズベキスタンの言語であったバクトリア語の仏典に関しても述べておかなければなりません。およそバクトリア語で書かれた文書が存在することすら、つい10年前までは知られていませんでした。最近になって発見された100点ほどの文書の中に、数点の仏教文献が存在することが報告されました。発表された1点は、仏典の奥書ですが、言及された仏の名前から阿弥陀経との関連が指摘されていて、この地域の仏教がどんな系統のものであったかについて興味が尽きません。またこれらの資料の一部は、最近イスラム教の原理主義者によって破壊された大仏で記憶に新しいパーミヤーンで見つかったらしいというので、そのことから興味深い資料です。

## A02「本文批評と解釈」

### A02-11・計画研究

#### 六朝期の著作における伝統の継承と変容

研究代表者 齋藤 希史  
国文学研究資料館文献資料部 助教授

研究分担者 興膳 宏  
京都国立博物館 館長

#### 研究目的

六朝期の学術文化は、古代以来の典籍の系統づけの成立、自覚的な文学創作意識の誕生、文学・書画理論の展開と異分野間の相互交渉という顕著な現象を有する点で、中国古典文化の流れにおいて、きわめて重要な位置を占める。本研究は、これらの諸現象相互を連関・統合させながら研究を加えることで、六朝学術文

化の全体像を提示しようとするものである。

具体的には、1) 梁元帝『金楼子』の研究、2) 文学批評用語の研究、3) 六朝伝記資料の研究の三つの柱を立てて、所期の目的を達する計画である。

#### 研究計画・方法

1) 『金楼子』は、本文校訂を行なう。国内資料では校勘に不足する事態も考えられるので、必要に応じ、中国の所蔵機関で調査を行なう。

2) 文学批評用語の研究は、データベースを作成する。適宜研究補助を雇い、作業の効率化を図る。

3) 伝記資料の研究は、六朝典籍の著者として重要な人物をピックアップし、資料の整理と訳注の作成に着手する。研究協力者の協力を全面的に仰ぎ、謝金・旅費などは多めに配分する。

全体の作業を通じて、コンピュータによるデータ処理を積極的に活用する。

### A02-12・計画研究

#### インド哲学における聖典観の展開

##### 本文批評の方法論的反省を踏まえて

研究代表者 丸井 浩  
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究分担者 金沢 篤  
駒澤大学仏教学部 助教授

#### 研究課題と目的

1. 哲学と宗教の融和ないし未分化は、一般的にインド思想の注目すべき特徴の一つとされているが、この問題を具体的にインド哲学原典に即して解明する試みは、従来あまりなされていない。

2. 本研究の課題は、インド哲学における聖典観の展開を、ニヤーヤの文献を中心に分析することである。ニヤーヤとは、論理的思考を非常に重視したバラモン哲学の一派であるが、正統バラモン哲学諸派とは異なり、ヴェーダ聖典を「信頼すべき言葉」の一種として相対化し、ヴェーダの権威の論理的証明に意を注いだ。特に10世紀前後にはその議論が盛んになされた形跡がある。

3. その意味でもっとも重要な情報源(内容・量ともに)となるのがジャヤンタ・バッタ(9世紀後半)の『ニヤーヤ・マンジャリー』、およびほぼ同時代に活躍したヴァーチャスパティ・ミシュラの諸作品であり、

本研究においても主としてこの二人の哲学者の著作解読がベースとなる。

4. 文献の解析には、可能な限りで写本レベルまでさかのぼり、かつ電子テキストの作成・活用を積極的に行うことによって、文献学的精度をより高めたい。

5. 19世紀後半から急速に発展したインド古典研究は、西欧におけるギリシア・ローマの古典研究や聖書研究で培われてきた厳密なテキスト批判校訂の方法論が基礎になっているはずだが、従来は異分野との交流がほとんどなく孤立した形でテキスト研究がなされてきた。こうした傾向を打開する意味で、本研究では聖書研究者等との密な交流を通して、本文批評・原文解読に対する方法論的自覚を分野横断的な視点から高めていきたい。

6. 最後に、本研究の成果の一部として、学問的に信頼しうる水準で、しかも一般読者の理解と関心が得られるような、インド哲学関連テキストの現代語訳の作成をめざす。

#### 学術的特色・独創性と意義

1. ニヤヤ学派を中心としたインド哲学文献におけるヴェーダ聖典観の展開を解明することにより、インド思想における宗教的権威・伝統と論理的・哲学的思考の相互補完的關係の一側面を明確にしたいと考えている。(研究テーマの重要性)

2. テキスト電子化が遅れているインド哲学研究の現状において、テキスト・データベースの積極的な活用を行い、かつ可能な範囲で写本にまでさかのぼり、選定した比較的少数の文献の精密な解読分析を期す。(ベースとなる文献実証主義)

3. 旧来、各研究分野ごとに分断されていた古典研究に、分野横断的な視点を導入して、西洋・東アジア・イスラーム等々の古典研究者との交流を活発に行うことにより、第一にインドにおける古典観(ヴェーダ聖典観はその一典型)の特異性と普遍性がより一層浮かび上がることが期待される。第二に本文批評の方法論に対する問題意識が高められる。(分野横断的視点)

4. 本研究の成果は最終的に、一般読者にインド哲学を紹介する窓口として活用したいと考えている。(一般社会への発信)

#### 研究計画と方法

古典インド哲学体系完成期にあたる10世紀前後のニヤヤの文献(ジャヤンタとヴァーチャスパティの作品が中核)の精密な解読作業を中心に、かつ内容的に密接に関連するヴァイシェシカ学派およびミーマムンサー学派の資料を援用して、インド哲学におけるヴェーダ聖典観の展開を、文献実証的に解明する。その

際、以下の点に特に留意する。

1) 調整班 A02でなされる本文批評・原文解読に関する、分野横断的な研究会・意見交換を積極的に行い、特にテキスト批判校訂の方法論上の問題点を整理し、かつ古典学の諸分野における古典観と比較しつつインド哲学における「古典としてのヴェーダ」の理念の特質を考察する。

2) 可能な限り関連テキストの写本情報・研究を遂行する。

3) 関連諸文献のテキスト・データベースの作成・活用を積極的に行う。

4) 研究成果の一部として、一般読者の理解と関心が得られるような関連テキストの現代語訳(抄訳)の作成をめざす。

---

#### A02-13・計画研究

### 旧約聖書の本文批評と解釈

#### その方法論的反省から翻訳の実例まで

研究代表者 関根 清三  
東京大学大学院人文社会系研究科 教授

研究分担者 月本 昭男  
立教大学コミュニティ福祉学部 教授

本計画研究の主たる目的は3つある。(1) 古典のテキストの読解に際し、本文批評に出発し、解釈学的理論と技法の実際がどうなっているか、古典学の諸分野から学びつつ、専門の旧約聖書学の場合について整理反省すること。(2) 解釈の最終的課題は、歴史的批判的方法ではテキストの歴史的意味規定であり、哲学的なそれでは、さらに解釈者の地平を考慮した思想的意味規定となるが、その両者の望ましいバランスについての理論を模索し、旧約解釈の場合に実際に適用すること。(3) そうした解釈学的な吟味を踏まえて更には、端的な意味規定としての翻訳に際して、訳語の統一、文脈での訳語の揺れの検討、過去の諸訳例との比較などを、コンピューターを駆使して遂行しつつ、具体的な翻訳の方法論と実践例を呈示すること、である。

上記目的の(1)については、バルト、シュテック、フォーラー等、ドイツの聖書学者の優れた研究があり、私の第三イザヤ書の編集史をめぐるドイツ語の最初の著作も、編集史の理論と応用の1つの突き詰めた例で

ある。個々の技法について旧約学の分野では、ほとんど行き着くところまで行っており、ここでは技法相互の関連について総合的に整理することと、調整班の研究會や公開シンポジウム等における他の古典学との情報交換の中で新しい知見を開いて行きたい。(2)に関しては(1)の歴史的批判的方法と、ガダマー、リクールらの哲学的解釈学の統合を目指したい。欧米でも日本でも、聖書学は哲学的解釈学に疎く、逆に哲学的解釈学は歴史的批判的方法を軽視しがちである。拙著『旧約に於ける超越と象徴 解釈学的経験の系譜』(東京大学出版会、1994年)や、昨年上梓した『倫理思想の源流 ギリシアとヘブライの場合』(放送大学教育振興会、2001年)などは、この点の統合の実際例を示しているが、統合の理論そのものについての純理論的な反省は少なく、この点も他の古典学との討議の中から学びたい。(3)本研究の最も具体的な成果は、(1)(2)を踏まえた実際の翻訳と注解に結実するはずである。すなわち、旧約預言書の『エレミヤ書』その他について、歴史的批判的な意味の確定と哲学的な解釈の、均衡の取れた訳注を産み出したい。私は既に『イザヤ書訳注』(岩波書店、1997年)で、この方向の研究の成果を公にしているが、当時はまだコンピューターを駆使することが出来ず、訳語の選択や統一についても恣意的なところが残った。今回、岩波の同じ叢書から『エレミヤ書』の翻訳を出すにあたり、コンピューターの専門家を研究補助者として、本文批評と解釈の理論の総合的な実践例を呈示したいと考えている。昨年度は、Glossaryのデータベース化等基礎作業を終え、約三分の二を訳し終えたところなので、今年中には完成する予定である。

なお国際的なネットワークの構築も常に視野に入れ、2001・02年9月日本での国際シンポジウムへの国際的学者の招聘・討論、01年10月の聖書神学をめぐるハイデルベルク大学でのシンポジウムへの招待・発表など、機会あるごとに国際的な学会や学会誌での発表、また英独語等での論文や著書の上梓に努め、国際学界との交流・共同研究を積み重ねて行きたいと考えている。

## A02-14・計画研究

### 初期キリスト教におけるイエス伝承の変容史的研究

研究代表者 佐藤 研  
立教大学コミュニティ福祉学部 教授

研究分担者 青野 太潮  
西南学院大学神学部 教授

#### 1. ねらい

研究代表者は1999 - 2000 (平成11 - 12) 年度、同題目の計画研究を認められ、それに従事した。これからの期間中に目指すところは、初期キリスト教におけるイエス伝承(あるいは福音書伝承)のテキスト形態の変容を史的に跡づけると共に、その変容の解釈論的力学を解明することである。同時に、そのテキスト変容の過程を新約聖書学の研究者および一般的関心層に容易に確認できる形で公表し、福音書テキストへの一般的関心をこれまで以上に拡大したい。

#### 2. 研究の特質

2.1. 本研究では、一方で、福音書が成立する以前の段階までイエス伝承を遡り、そこにおける諸テキストのインターアクションを緻密に観察する。また、それらの伝承テキストが「福音書」という類型に(四福音書記者によって)編集され始めた後の、諸福音書間の受容・変容関係を考察する。同時に他方で、諸福音書成立以後もそれらと並列して依然存在していた(あるいは新たに創作された)イエス伝承テキストを、紀元2世紀の使徒教父文書や新約外典・教父文書、さらには「異端」と呼ばれるに至る文書(とりわけグノーシス派の「トマス福音書」)の中に探り、それらの変容の形態史を追跡する(ここで研究分担者・青野太潮氏の専門的見識が最大に発揮される)。つまり、イエス伝承を福音書を中央に、前後に拡大された時間的枠において考察する。これによって、「古典」としての福音書に固定化されていたイエス伝承はその枠を超え、2世紀に及ぶ発生と変容の流動的過程の中で通時的に鳥瞰され、その力学が探られる。このことは、「イエス現象」とは何であったのか、改めて把え直す必要性を示唆する。

2.2. この作業の重要な一過程として、既に先の計画研究(1999 - 2000年度)の段階で、福音書の新たな日本語訳を改訳・完成した。その際、教会の「聖なる書」としての在り方を前提とするのではなく、テキストの理解それ自体のための学問的翻訳であることを主眼と

した。

2.3. 上記の変容史が瞭然とするような形態の「福音書共観表」(synopsis)を、コンピュータを使用して、ギリシャ語版と日本語版(上記新訳使用)の二形態において作成する。コンピュータの普及によって多数の聖書プログラムが誕生するに至っているが、当該研究の目指す伝承軌跡の瞭然化を実現した「共観表」はまだ登場していないためである。この作業中、先の計画研究(1999-2000年度)においてギリシャ語版は9割程度仕上がった。その完成をめざすと共に、現在は邦語版共観表の作成に取り組んでいる。

2.4. このようにして得られたイエス伝承の変容史とは、それに固有の力学を持つものなのか否か、当該特殊領域研究における他の古典作品の伝承史研究とつぎ合わせて検討したい。ここでは、当該特殊領域研究の長所が最大に活用されよう。その共同作業は、イエス伝承研究を比較古典学的地平に新たに移行させると思われると同時に、逆に新約聖書学的方法論が、他の古典研究の促進に寄与することも期待できる。

---

#### A02-15・公募研究

### 中国恋愛文学の発掘

研究代表者 川合 康三  
京都大学大学院文学研究科 教授

中国の伝統的文学は儒家の理念に支配されているために、倫理的、政治的な色合いが強く、そのために他の文化圏の文学と異なって、恋愛の要素が乏しいと言われてきた。しかしながら文学の範囲を広げて、庶民の享受する文芸・芸能まで視野に収めてみれば、中国でも恋愛が重要な要素となっていることは、近世以降の戯曲・小説、また民間の芸能から明らかである。そのことから近世以前の、白話資料が至って少ない時代においても、実際にはおそらくそれと同じような状況であったであろうと推察してみるのには当然であろう。今日までのこされている士大夫の文学だけを対象として中国の文学を決定してしまうことはできない。

とはいえ、庶民を含めた広範な人々が享受した文芸がどのようなものであったか、それには資料が限りなく無に近く、再現するのは不可能と断言している。

しかし士大夫の担う正統的文学のなかにも、恋愛文学の痕跡、ないし変形とおもわれるものを見付けるこ

とができるのではないだろうか。ごくわずかにのこる民間の文芸を材料にして子細に検討してみると、士大夫の文学にもそれに近いものが認められる。そこには世界各地の恋愛文学のモチーフと驚くほど共通する性格がある。また、それは民間文芸におけるモチーフが士大夫の理念によって変形され、歪曲されながら生き残っている姿も確認できる。

中国古典詩には悼亡・閨怨、あるいはまた民間に発生した歌謡に基づいて士大夫が創作した楽府など、男女の情愛を唱うことが公認されているジャンルがあるが、そうした作品を通して、そのなかに恋愛文学のテーマ、モチーフ、表現手法などの痕跡を抽出する。さらにはそれ以外の詩歌をも対象として、そうした作業を積み重ね、そこに発見された恋愛文学の要素が、他の通俗文芸のなかにも共通してみられるものであることを探っていく。

このようにして中国にも存在していたであろう恋愛文学を、士大夫の文学のなかから発掘していく。またそれによって、士大夫の文学がスクリーンによって濾される以前の、雅俗ともに含む母胎としての文学の全体像を構築していく。

また中国では恋愛文学が貧弱である代替として、友情の文学が重要な位置を占めると言われてきたが、この見方にも再検討を加える。それに先立つ基礎作業として、中国において男どうしの友情がどのように文学化されてきたか、その系譜を追跡し、「友情の文学誌」を作り上げる。それをさらに精緻に分析することによって、友情なるものが実は恋愛の一つの変形として形成されてきたのではないかと、そうした作業仮説をもとに、作品の読解を進める。

---

#### A02-16・公募研究

### 元明代散曲の解釈

研究代表者 金 文京  
京都大学人文科学研究所 教授

中国、元代を代表する文学である元曲は、当時の演劇である「雑劇」の歌辞として用いられるものと、たんに歌唱される散曲に大別される。うち「雑劇」については、演劇戯曲史の観点から、従来多くの研究が積み重ねられて来たが、一方の散曲については、その特異な内容および難解な語彙のせいもあって、中国古典

文学の中でももっとも研究のおくれた分野として取り残されている。特に日本では、田中謙二氏の一連の業績（『元代散曲の研究』『田中謙二著作集』巻一、汲古書院、『楽府・散曲』筑摩書房など）以外には、近数十年の間に一篇の論文も発表されたことがない現状である。

このような研究状況に鑑みて、申請者は先に、平成11-12年の特定領域研究(A)「古典学の再構築」の公募研究「元明時代の散曲研究」によって、元代散曲の総集である『全元散曲』のデータベース化をすすめ、ほぼその作業を終えることができた。また散曲と密接な関係にあり、その有力な母胎と目される金代の諸宮調作品として現在唯一完全な形で伝わる『董解元西廂記諸宮調』について、その全訳と注釈および関連する研究(共著)を、平成10年2月に公刊した(『董解元西廂記諸宮調研究』、汲古書院)。該書では、難解語彙の解明および唐・宋の詩および宋词がいかに作品の中に吸収利用されているかについて、特に注意を払ったつもりである。

本研究は、それを踏まえて、元代およびその延長としての明時代の散曲の主要な作品をできるだけ正しく解釈し、その真の文学的価値を明らかにするとともに、文学史におけるその正当な地位を模索しようとするものである。

そのために以下のふたつの作業を行う。まず散曲の中でも特に難解とされる当時の口語、俗語の意味を可能なかぎり正確に解明する。と同時に、散曲の中にあられる前代の古典詩、詞の用いられ方を検討して、それが中国古典詩歌の伝統をいかに継承し、また変化させたかを併せて分析する。このふたつの作業を通じて、散曲作品の正しい解釈を行い、その文学的特性を明らかにするのが、本研究の目的である。具体的には、関漢卿、白仁甫など元代前期の主要作家の散曲作品の主なものについて注釈を施し、日本語に翻訳するとともに、それらが古典詩歌をいかに利用、変容させているかを、さまざまな視点から考察するつもりである。関漢卿、白仁甫など元代前期の主要作家の散曲作品の主なものについて注釈を施し、日本語に翻訳する。

## A02-17・公募研究

### 『全明俗曲』の編纂

研究代表者 大木 康

東京大学大学院人文社会系研究科 助教授

中国の明代(1368~1644)、とりわけその後期には、通俗的な歌謡である各種「俗曲(小曲)」の流行現象が見られた。明末の人、沈徳符の『万曆野獲編』巻25「時尚小令」によれば、弘治(1488~1505)より後、中原の地域では「鎖南枝」「傍粧台」「山坡羊」、それに続いて「耍孩児」「駐雲飛」「醉太平」などの歌が流行し、嘉靖(1522~1566)隆慶(1567~1572)の間には、「鬧五更」「寄生草」「羅江怨」「哭皇天」「乾荷葉」「粉紅蓮」「桐城歌」「銀紐糸」などが江南地方に至るまでの広い範囲で流行し、さらに万曆(1572~1620)の時代になって「打棗竿」「掛枝児」の二曲が、南北、男女、貴賤を問わず大流行している、と記されている。この現象は、明代末期における戯曲や小説などの俗文学の隆盛とも並行する興味深い現象であり、これら俗曲は当時の人々の心性を探る上でも貴重な資料である。

しかしながら、これらの歌謡は、明末に馮夢龍によって収集編纂された『掛枝児』『山歌』を除けば、単行の書物として残るものはほとんどなく、あとは当時の戯曲選集(例えば『玉谷新簧』巻1の中段に「耍孩児」が収められる)、白話小説(例えば『金瓶梅詞話』では登場人物によってしばしば「山坡羊」が歌われる)、また当時の筆記(随筆)の類に、断片的に記録されるばかりである。これら各書に散見する歌をできうる限りすべて拾い集め(輯佚)、本文を校訂し、今日に残る明代のあらゆる俗曲についての信頼できる定本を作成せんとするのが本研究の主たる目的である。

関連する研究は中国に、路工編『明代歌曲選』(上海古典文学出版社 1956年)、蒲泉・群明編『明清民歌選 甲・乙集』(ともに上海出版公司 1956年)などがあるものの、まずは「歌曲」なり「民歌」なりの定義が不明瞭であり、収録される歌の範囲にかなりのゆれが見られる。謝伯陽編『全明散曲』(齊魯書社 1994年)の中にもこれらの俗曲を収めるが、同じ歌が複数の選集に収められている場合、いずれか一つのテキストによってしか記録されておらず、改めて互見の指摘と校訂を行う必要がある。またいずれも白話小説や筆記小説の中に見える俗曲を拾っていない、などの欠点が認められる。

本研究では、これら従来の研究を踏まえつつ、その

欠点を補うべく、新たに『全明俗曲』を編纂し、あわせてそれらの注釈、翻訳を行うことを目指したい。

研究代表者（大木）は、かねてより中国明代末期の通俗歌謡に関心を抱き、「馮夢龍『山歌』の研究」（『東洋文化研究所紀要』第105冊 1988年2月）をはじめとする論考を発表している。しかし、これまでの研究はいずれも馮夢龍の編纂した比較的まとまった歌謡集である『掛枝児』『山歌』に限られており、明代の他の歌謡を十全に含むものではなかった。明代の通俗歌謡の全体像を知るためには、どうしてもこれら以外に断片的に残った歌謡をも視野に収める必要があり、本研究を思い立ったものである。

---

#### A02-18・公募研究

### 中国周縁地域における「華化メカニズム」と学術の伝播

研究代表者 木津 祐子  
京都大学大学院文学研究科 助教授

中国文明を考えるときに、忘れてはならない大きな要素は、「華化（シノライゼーション）」という問題である。それは、単に非漢族が圧倒的な中華の勢力下に取り込まれていく漢化の過程を指すのではなく、周縁地域において、同時交替的に「華」の「非華」化という現象を孕みながら、大きな流れとしては双方による作用と反作用を繰り返しつつ、「華」のエリアを拡大していくことを指す。北魏期に起こった「華化」現象は、中華の周縁部に常に繰り返される「華化」メカニズムを考える上で、貴重なモデルを提供してくれる。東アジアの歴史を考えると、この「華化」は不可避の問題であろう。新しい「正統」王朝を建てようとする時、言語の正統を摸索するのは、北朝に限らず、清朝も、中華民国も、そして域外では明治政府すらも実は同じであった。本研究では、このような「華化」と学術伝播についての考察を広く中国周縁全体に押し進め、具体的には日本や琉球などの境外においても学術を、「華化」とそれにまつわる「正統」の獲得という視点から考察していこうと考える。「華化」と学術伝播の歴史の中で、言語政策と言語自体の変容を考えようとする点で、本研究は従来の研究とは異なる新しい視点を有するものである。またそれは、社会学・歴史学などの他分野との連繋が期待される意味でも独創

的研究ということができる。本研究は、これまで国内で単独の領域として研究されてきた、民族学・地域学・社会学・古典文献学の領域を横断する研究として位置づけることができる。というのは、「華化」は学術の場面のみならず、外交や貿易、移民などの諸要素と切り離して考えることができないため、それら諸領域の研究成果に常に目を配る必要があるからである。

13年度は、各地に保存される中国学術の周縁的資料（主として言語学習資料）をデジタルカメラにより保存し、それを画像データとして文献目録や解題の文字資料にリンクさせる方式で、資料集を作成する。その作業は、高速処理が可能なコンピュータによって行う。これらによって、本領域における基礎資料を作成することができ、将来より広いエリアで実施されるであろう「華化」と文化の伝播の問題についての方法論を構築する。また、特に琉球における中国学学習における古典テキストの利用と解釈学の伝承について考察を行う。

14年度は、13年度の作業によって整理した画像データを、カラープリンタを用いて、書冊形態へ保存する。また、沖縄や台湾、さらに中国福建省で文献調査を行い、東南周縁部へのテキストの継承関係を明らかにする。これらをもとに「華化メカニズム」のベクトルと力量に関しての普遍性と地域的な特殊性について考察するのだが、中国北西地域との比較には、13年度に購入する中国蒙古文古籍総目を用いて収集した文献を用いる。これらの作業によって中国の北西周縁と南東周縁における学術伝播とくにテキスト伝播の特徴を明らかにする。

---

#### A02-19・公募研究

### ヴェーダ散文文献の翻訳と注解

研究代表者 後藤 敏文  
東北大学大学院文学研究科 教授

「ヴェーダ」は紀元前二千年期の後半から仏陀の出現に先立つ時代に懸けて、各学派の祭官たちによって製作・編集された宗教文献群の総称である。その散文部分は「ブラーフマナ」として知られ、紀元前800年頃にまで遡ると推定される。更にこれを引き継いでウパニシャッドが成立した。言語的には、インドヨーロッパ語の純度を高く保つ散文の最古の姿を示し、ホメ

一ロスの叙事詩がほぼ同時代に成立した韻文であることを考えてもその重要性が理解される。後のインドアーリア語にとってはその出発点である。儀礼用の讃歌・祭詞と祭式行作の意義付けを巡る思弁を中心としながら、世界の創生・構成、生命の発生と循環、日・月・季節・年ごとの行事の根拠付けなど、当時の「世界理解の学」が総動員されている。この文献の厳密な理解からは、ウパニシャッド、仏教、ジャイナ教、婆羅門・ヒンドゥー諸学派など、「輪廻」と「業」を中心に展開する後の思想的営為の解明に向けて手掛かりが得られるだけでなく、古今の宗教研究一般や、今日盛んなフィールド研究に基づく文化の諸相の研究に対しても、文献に裏付けられた重要な情報・比較材料が提供される。言語上姉妹関係にあるイーラーン（ゾロアスター教文献、アケメネス朝碑文をはじめ中央アジア出土の中期諸文献など）をはじめ、古代ギリシャ、アナトリア、さらにはヨーロッパ文化の古層の解明に際しても有効な分析への視点を齎す。生活文化の点では、さらに西南アジアの遊牧社会との比較・照合が期待できる。今日までの関連各分野の発展は、漸く信頼できる翻訳と深い理解とを可能にする基盤をもたらし、厳密な翻訳と註解とが待たれる段階に達している。膨大な文献群から特に重要で目的に適った部分を選び、多角的な注記とともに提示したい。人類の知的営みの歴史を改めて見直す時、古代インドの初期の段階で、いわば徒手空拳で達成された世界や生命に関する思弁の精緻さと問題意識とは、現代に生きる我々にとっても、誇りを持って共有できる部分が発見できるであろう。また、他のヨーロッパ等の古典と比較することによって、インドヨーロッパ語の共通時代に遡る諸要素が少なからず確認できる。アテーナイの黄金時代を経てその後のヨーロッパ世界へと開花する道と、仏教興起・ヒンドゥー化を辿ることになる道とが完全に分岐する前の知的遺産の確認は、その後の世界史展開の評価に有意義な視点を与える。従来個別に研究され、個々の知的遺産として理解される傾向が強かった各「古典」を照合し、さらに人類共通の知的基盤として吟味しなおす為に不可欠な一指標ともなる。19世紀的ディスイプリンとして研究を導いてきた欧米の学的環境が必ずしも「古典の再構築」に相応しくなくなりつつある今日、申請者は日本語における発表に、将来に向けての意義を認めるに至っている。

これまで2年間の研究成果に立って、20篇程の部分について原典の読みを確定し、翻訳する。当時の専門家間の議論の中で語られる物語、神話が多いので、詳細な説明、注記が必要となる。祭式の説明、研究史、

他の（インド内外の）関連文献個所への言及の他、原典批判、語形、アクセント、語彙、シンタクス、人物・事物に関する個々の注記を付し、出版原稿として整える。ヴェーダ散文の文法書、読本に類するものは今日まで国内外を通じて無いので、語彙集と簡便な文法とを付して高度な入門書の役割をも持たせたい。

---

## A02-20・公募研究

### ディグナーガ著『ニヤーヤ・ムカ』（因明正理門論）の本文批評と解釈

研究代表者 桂 紹隆  
広島大学大学院文学研究科 教授

本研究は、インド論理学に新しいモデルを提供した仏教論理学者、ディグナーガ（480 - 530年頃）の最初の本格的な論理学書である『ニヤーヤ・ムカ』の本文批評と解釈を通して、21世紀における古典学の再構築に貢献しようとするものである。

『ニヤーヤ・ムカ』の本文は、古典文献学の研究対象として大変ユニークな存在である。その梵語原典は、残念なことに、現在までのところ発見されていない。6世紀に渡印した中国の翻訳僧、玄奘の漢訳『因明正理門論』がわれわれに残された唯一の資料である。

ところで、ディグナーガは、後年主著である『プラマーナ・サムッチャヤ』とその『自注』を著した際に、しばしば『ニヤーヤ・ムカ』の本文をそのまま利用している。『プラマーナ・サムッチャヤ』および『自注』もまた、その梵語原典は散逸しており、必ずしも良好とは言えない2種のチベット語訳が現存するだけである。しかし、それらを利用することによって、『ニヤーヤ・ムカ』の本文に相当もしくは類似するもののチベット語訳を想定することができる。

一方、『プラマーナ・サムッチャヤ』および『自注』には、ジネードラブディ（8世紀）の著した復注『テーカー』が存在する。その梵語原典も散逸しており、従来はかなり信頼の置けるチベット語訳で研究されてきたが、近年になってようやくその梵語原典の写本の存在が知られるようになった。残念なことに、未だ一般に利用できる状態には至っていないが、この資料を通して、『ニヤーヤ・ムカ』の本文に相当もしくは類似するものの梵語原典を想定することができるようになったわけである。

以上全ての資料を利用することによって、『ニヤーヤ・ムカ』の本文をできる限り原典に近い形で再構築することが、本研究の第一の目的である。それは、玄奘訳をベースとして、それに梵語断片やチベット語の平行・テキストを添付したクリティカル・テキストを作成するという形で、この2年間で実現したい。『ニヤーヤ・ムカ』そのもの梵語原典の写本の存在も噂されて久しいが、もしそれが発見されることがあれば、本研究は、同書の批判的校訂に大いに貢献するはずである。

本研究代表者はすでに、一連の研究論文として、詳細な注釈を付した『ニヤーヤ・ムカ』の現代日本語訳を公表しているが、今回はそれをさらにリファインして、インド仏教論理学の「古典」の名に相応しい、一般読者にも親しみやすい現代語訳を作成し、2年後には刊行したい。

以上の『ニヤーヤ・ムカ』研究は、宇井伯寿やG. Tucciが70年以上前に公表した『ニヤーヤ・ムカ』研究を凌駕して、仏教論理学研究の革新に貢献するものとする。

さらに、『ニヤーヤ・ムカ』の記述しようとしている論理学のシステムを従来の演繹論理や帰納論理の視点からだけでなく、パースの アブダクション や近年再評価されつつある レトリック（説得の論理）の視点からも分析して、インド論理学の新しい評価・解釈を提示したい。そのために本特定領域研究のうち「古典の世界像」班の小池澄夫「古典古代の弁論家と修辭的伝統」や「近現代社会と古典」班の月村辰雄（他2名）「ヨーロッパのレトリック教育」との積極的連携を計るつもりである。そして、ギリシャや近現代ヨーロッパとの比較研究を通して、インド文明が育んできた論理的思弁の特質を明らかにすることを目指している。

---

## A02-21・公募研究

### 法称の推論説とその展開

研究代表者 岩田 孝  
早稲田大学文学部 教授

#### 研究の目的

過去の五年間にインド論理学に関する国際的なパネルがほぼ毎年開催され、インド論理学の全体像が幾分

見えるようになってきた。しかし、インド論理学の発展に関する分析は未だ十分とはいえない。インド論理学の発展に大きな貢献をした仏教論理学の全貌が未だ把握されていないからである。即ち、インドの婆羅門学派の伝統的な論理学に対峙した形で、仏教が、伝承された論理的諸用語を吟味しつつ、その中で不要なものを整理して、より合理的な論理的体系を打ち立てたこと、そこに仏教論理学からの寄与が見られるのであるが、その仏教論理学の文献学的な研究が十全に揃ってはいないからである。そこで本研究では次の二点を研究目的とする。一方において、仏教論理学の基本的な文献でありながら未解読のまま残されている文献を精読してその訳注を作成すること、また他方において、解読した資料をもとに、仏教論理学とインドの正理学派の論理学や西洋論理学との比較を行う為の資料的な基盤を確固とすること、この二点を研究の目的とする。

仏教において仏教論理学の基礎を築いた学匠は陳那（六世紀前半）である。陳那説に基づいて、仏教論理学の大綱を整備したのが法称（七世紀中葉）である。陳那の論理学では、推論の大前提となる、論証因と帰結される所証との間の論理的関係を確定する為に、喩例を用いる。ここには、一つの実例から一般的な論理的関係を帰納するという考え方がある。その意味で陳那の論理学は帰納的である。法称はこの帰納的な要素を除くことに努めている。これは、法称が、より整備された論理学を構築することに努めた一つの証しである。その背景にあるのは、可能な限り少ない原則により論理的現象を説明するという考え方である。本研究では、この考え方に着目しながら、法称が、独自の公理系により、これまでの論理学をどのように整備していったのかを文献的に精査する。

#### 研究計画・方法

法称の著作の多くは既に解読されているが、未解読のものも残されている。その一つが、『知識論決択』の第三章の「他者の為の推論」章である。『知識論決択』を解読する研究計画については、1960年代より、ウィーン大学のシュタインケルナー（Steinkellner）教授が中心となってドイツ語の訳注を進めており、現在では、第一章（直接知覚章）と第二章（自己の為の推論章）の訳注が出版されている。残る第三章の解読を、筆者が担当している。

本研究で解読を行う『知識論決択』の梵文原典は散逸しており、この論書を翻訳するには、チベット語訳のテキストを用いるほかに方法はない。チベット語は梵文と構文を異にするので、チベット訳テキストのみ



では、文脈的に正確な解読ができない場合も少なくない。その場合には梵文の断片の回収が不可欠である。シュタインケルナー教授は、梵文断片を回収しつつ、上述の第一章と第二章の翻訳について、多くの箇所を改良を行っている。昨年、改良に関する新たな情報を同教授より頂いた。平成11年度より進めている第三章のドイツ語訳注にも、再度文献的なチェックが必要となってきた。『知識論決択』の個々のテキストを読み直し、更なる改良を加える為に、ウイーン大学においてシュタインケルナー教授と共にテキストを精読する。

法称の論理学の特色は、推論の大前提となる論証因と所証との論理的包摂関係が如何に成立するのかという問題を考究し、その包摂関係の成立根拠として、現実に存在するものの中に成り立つ本質的結合関係 (svabhāvapratiḥbandha) を導入したことにある。これは陳那に見られない法称の独自の見解である。その本質的結合関係は、因果関係と同一性から構成されると法称はいう。この見解によると、すべての推論は、因果関係と同一性に基づいて成立することになるが、果たしてそのように簡潔に推論の成立根拠を限定できるのかということが問題となる。この問いに答える為には、文献学的な解読に基づいた法称の論述の吟味が必要である。因果関係については合理的な説明があっても、同一性については若干の問題が残る、と筆者は考えている。この問題について、平成13年にワルシャワ大学で開かれるインド論理学の国際会議において発表する。

推論説に関する法称の論書としては、法称の初期の作品である『知識論評釈』がある。この第四章にも「他者の為の推論」章があり、この章の英訳研究を、スイスのロ・ザンヌ大学のティルマン (Tillemans) 教授が進めている。この二年間に、相互の研究の成果を交換し、将来の共同研究の為に、『知識論決択』の英訳の為の準備を行う。上述の『知識論決択』のドイツ語訳注では文献学的に詳細な注解に力点が置かれるが、ティルマン教授との研究では、分りやすい英訳を作成し、東西の論理学の比較の為の基盤とすることを目的とする。

## A02-22・公募研究

### インドの聖典解釈学における統合理論の基礎的研究

研究代表者 吉水 清孝

北海道大学大学院文学研究科 助教授

本研究は、インド最古の宗教文献であるヴェーダの統一的解釈に携わっていた聖典解釈学派 (ミーマーンサー学派) の古典インド時代における代表的学者であるクマーリラ (600年前後) の主著『解釈原理の評釈』 (タントラ・ヴァールティカ) の第2巻第2章、第3章及び第4章について、刊本未使用の写本に依拠して刊本テキストに訂正を加えつつ、クマーリラの聖典解釈理論において従来全く指摘されていなかった「聖典中心主義」的な側面を解明する。聖典解釈学派では古来よりヴェーダを人間の著作ではない永遠不滅の天啓聖典として神聖視していた。彼らによれば、「天界を望む者は祭式をするべし」というヴェーダの中の根本的だが抽象的な祭式命令文 (教令) は、個人が祭式主催を自らの義務として自覚せしめるのみならず、祭式遂行への命令を他の末端の諸規範に伝播させて、テキスト全体を統合していくと考えた。本研究の研究代表者は、平成11-12年度の「古典学再構築」の公募研究として『解釈原理の評釈』の第2巻第2章を研究し、従来聖典解釈学派の中では個人主義的・功利主義の性格が強いと見なされてきたクマーリラに、聖典内での教令から他の文章へと規定の働きが「遷移」 (サンチャラーないしサンクラーンティ) することにより聖典が自律的に階層構造を築くという、聖典中心的思想があることを発見した。またクマーリラは、教令が末端の諸文章と結びつくことにより諸要因を祭式の体系の中に概念上統合していく働きを「受容」 (ウパーダーナ) と名づけ、『解釈原理の評釈』第2巻全体に渡って、術語ウパーダーナを頻繁に用いていることが判明した。これらの用例をそれぞれの個所が問題としているヴェーダ祭式の場面の文脈の中で個々に吟味していくならば、クマーリラが、生活の現場での個人の行為とその効力に関心を寄せていたのみならず、聖典を有機的統一体と見なす伝統的思想の持主でもあったことが解明される。これにより、聖典中心主義的なプラバーカラ対人間中心的なクマーリラという、聖典解釈学派を概観する従来の図式は根本的な再検討を余儀なくされるであろう。また今回の公募研究では、特に古代イスラエルと古代中国の古典研究者との共同討議に

より、ユダヤ教律法学者と荀子の聖典観についての知見を深めたい。社会的危機に晒された古代イスラエルで聖書の権威が一層高められ、特にモーセ五書（トーラー）が天地創造の遙か以前から神のもとに存在したと考えられたのは、インドで仏教などの新興宗教が社会的支持を強化し、バラモン優位の価値観が崩れてきた社会的変動期に聖典解釈学派が誕生したのと軌を一にしている。また性悪説に立脚する荀子は礼による教育と統治の必要性を説いたが、この礼とは孟子が「礼の端」だとした「辞讓の心」のような主観的格率ではなく、インドの聖典解釈学派が諸規範のうちの第一のものとして神聖視するヴェーダのように、伝統社会の中で客観的に規定された礼制であった。これら二つの分野での聖典観をインドの聖典解釈学派の聖典観と比較することにより、インドにおける聖典観の普遍性と特異性とを解明していきたい。

---

#### A02-23・公募研究

### 17世紀における二つの聖書批判のアプローチ： バルーフ・スピノザとリシャール・シモン

研究代表者 手島 勲矢  
大阪産業大学人間環境学部 助教授

21世紀に向けて、聖書学の方法論の見なおしをする上で、聖書の歴史批判を作り出していった人々がア prioriに仮定していた前提とは何であるのか、そのあぶり出しは、絶対に欠かせない作業である。その意味で、17世紀の近代聖書学の生みの親、バルーフ・スピノザとリシャール・シモンの比較は、前述の問いに対して、多くのことを明らかにするであろうと期待される。特に、近代の聖書学は、資料説と共に発展したが、その資料説の土台を築いたのは、18世紀のアストリックである。彼は、しかしながら、スピノザの仕事には批判的で、シモンの仕事を自説の土台として考えていたようである。ある意味で、スピノザの歴史批判は、それ以後、キリスト教徒の手による聖書学の発展に直接影響を及ぼす位置から退いてしまう。スピノザのアプローチが、なぜ受け入れられなくて、なぜシモンのアプローチが受け入れられたのか、ここに資料説を誕生させる経緯の理解に、両者の歴史批判の比較は、光を当てることになり、また、近代の聖書学の前提とは何かという非常に重要な問いに（部分的にでも）答え

る第一歩になると信ずる。それで、研究の焦点は、シモンとスピノザが、ユダヤ教の伝承であるマソラ・テキストや、母音記号・アクセント記号、口伝律法の価値、また聖書の歴史の意味とは何かなどの問いや問題において、どのように異なる二つの意見を有しており、または同じ立場に立っており、それらの意見の違いと共有される立場が歴史批判をする上で、二人のアプローチにどのような前提の違いを生み出していったのか、できれば、個々の具体的問題から、ユダヤ教とキリスト教の差異の考察に絡む解釈学的・形而上的側面の議論にまで高まることを望む。

この研究は、私が「聖書注解史序論」で提案した、プシャット（歴史の意味）の立場の注解史を描くための準備・基礎研究である。つまり、17世紀は、それまでの古代から中世までの聖書解釈と近代・現代聖書学を分ける分水嶺である。その17世紀の意味を理解するのに、17世紀と近現代の聖書学の繋がりを明らかにすること、17世紀と古代・中世の聖書解釈の関係を明らかにすることが必要であるが、それを可能にするのがスピノザの徹底理解である。なぜなら彼は、中世ユダヤ教の聖書解釈にも精通して歴史批判の方法論を打ち出したからである。そしてスピノザを徹底的に理解するには、スピノザの聖書批判を批判したりシャール・シモンと比較することである。17世紀の研究者は、このような聖書学の視点から、スピノザやシモンを見ることがないばかりか、私の限られた知識の範囲では、シモンとスピノザを聖書学の視点から本格的に比較考察した仕事は皆無である。

13年度は、シモンのテキストの校訂と精読。スピノザの「神学・政治論」との比較を視野に置きつつ、シモンの問題点の抽出とシモンの中心的議論の確定。2年内の研究で、議論できることとできないことの見極め。論文の章立てのドラフト作成。

シモンの著作「旧約聖書の批判的歴史」については、長らく学者の間では無視されてきて、最初のテキスト校訂も含めて分析をはじめなければいけない。従って、原書を手に入れることはもちろん、シモンの英語訳も含めて、17世紀・18世紀の書物が手元に必要である。この購入は安価ではない。又、ユダヤ教学の雑誌の多くは19世紀のドイツにおいて生まれたが、これらの雑誌のコピーや、資料閲覧は、多分、イスラエルでは国立図書館、アメリカではハーバード大学のユダヤ・コレクションなどに頼る必要が出てくる。またマソラやユダヤ教資料の場合、写本によるテキストの確認、照合も必要になるだろう。その場合、現地の助手に頼る必要と、自ら出かけて行く必要と、両方を想定する。